

2014年度 センター試験 国語(本試験) ワンポイント解説

第1問	問1	<p>(ウ)の「軍功」が浮かばなかった受験生がいたかもしれないが、文脈から熟語の意味を考えることで正解できる。基本問題である。</p>
	問2	<p>選択肢がすべて「中国に目を転じて時代をさかのぼり、～ことで」となっているところに注意する。6段落で中国古典文と士大夫の関係が説明され、7段落、8段落で例を挙げてさらに具体的な説明を加えていることを押さえれば、それだけでも④を選ぶことができる。また、傍線部の「もう少し広く考えてみましょう」が直前の4段落の「その過程で、ある特定の思考や感覚の型が形成されていった」を受けた表現であることに着目すると、④後半の「近世後期の日本において～が把握できるから」の部分がその点に触れており、正解はやはり④しかない。</p>
	問3	<p>傍線部直後で、「その書きことばの世界は古典世界としてのシステムを整えていき、高度なりテラシーによって社会に地位を占める階層が、その世界を支えました」と説明されている。「システムを整えていき」に着目すると、④の「確立した身分秩序が流動化していった」、⑤の「システム全体の変容につながっていった」が合わないことがわかる。また、6～9段落の内容と照らし合わせても、①の「道家のことばに導かれ、上昇志向を捨てた人々がいる」、③の「高度な教養を持つ士大夫」「儒家の教えが社会規範として流布し」がまったく合わないことがわかる。②に関しては「中国古典文の素養が士大夫にとって不可欠になる」が8段落に書かれており、「リテラシーの獲得に対する人々の意欲が高まる」に関しては、直前の「その書きことばによって構成される世界に参入することが、すなわちその階層に属することになる」に対応している。</p>
	問4	<p>直後の文で「これは～そうした武に支えられてこそこの文であるという意識が生まれる契機にもなります」とあり、傍線部がきっかけで生じる事態がはっきり書かれている。15段落で「行政能力が文、忠義の心が武」と説明されており、その内容を説明している選択肢は④しかない。④後半の「学問につとめる自らの生き方を正当化できるようになった」については、17段落の内容と対応している。</p>
	問5	<p>選択肢がすべて「武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、～とともに、～になったということ」という形になっている。漢文を学ぶことで二つのものを得るという説明であるから、18段落の冒頭「もう一つ」に着目し、17段落、18段落の内容と照合する。17段落で「学問は士族が身を立てるために必須の要件となりました」とあり、その内容に触れているのは③しかない。また18段落では統治への意識、士大夫の自己認識が身に付くことが述べられており、③の選択肢にその点がはっきりと書かれている。</p>
	問6	<p>(i) ①は「読み手に問いかけるような」とあるが、9段落は当てはまらない。③は「確認・念押し」はよいとしても、「次の話題に移ること」は「明らか」とは言えない。④は「漢籍を待たずとも」「文武両道なるものは」「学術的な言い回し」ではない。</p> <p>(ii) ②は第3段落～第16段落と第17段落～第20段落に分けているが、第16段落と第17段落のつながりを考えればおかしい。③は第1段落～第10段落を一つのまとまりとするのがおかしいし、前半・後半の説明内容もおかしい。④は「起」「承」は言えるかもしれないが、「転」「結」は本文内容から考えられない。</p>
第2問	問1	<p>(ア)「刻々に」は、「刻一刻、一刻ごと」という意味。 (イ)「腰を折る」は、「途中で妨げる」という意味。 (ウ)「われ知らず」は、「自分で意識しないで、思わず、知らず」という意味。</p>

	問 2	傍線部は「そう言ってさっさと廊下を歩いて行く兄の後姿」を見て生じた行動であることを押さえ、兄の台詞にまず着目すると、②が明らかにおかしいことがわかる。①・④・⑤については、「家族のための仕事」に関わる内容がそれぞれ本文の記述からは読み取れない。また、傍線部自体に着目すると、①「孤独を感じている」、②「恥ずかしさにいたたまれなくなっている」、④「憤りを抑えがたくなっている」、⑤「投げやりな気分になっている」が「吐息をつく」心情と合わないのは明らかである。
	問 3	「自分独特の生き方を発見した興奮」に「わくわくして肌を強くこすった」とあるから、「自分独特の生き方の発見」に言及しているかどうかで選択肢をチェックする。「発見」について触れているのは④しかないので、正解はこれで決まる。念のため、「興奮」に着目すると③・⑤はまったくこれに触れていない。また傍線部 B は湯屋における心情であるから①・②の『走る』うちに」という説明はおかしい。さらに「自分独特の生き方」に関しては、45～47行目で「違った世界に生きている」という表現があり、それについて言及しているのもやはり④だけである。
	問 4	各選択肢が「陸郎は～。一方、道子～」となっているので、陸郎、道子それぞれの説明部分を本文記述と照合すればよい。③の陸郎の説明では「道子を気安く冷やかしたりもする」様子が8行目の陸郎の台詞にあり、「妹の後をつけてほしいという母親の指図には素直に応じる気にはならない」様子が60～61行目に書かれている。道子については、本文33行目にそのまま書かれている。他の選択肢の説明は、本文の記述と合わないか、まったく記述されていない。
	問 5	直前に笑い合った理由がはっきりと書いてある傍線部 D から目をつけると、選択肢は判別しやすい。「走ったこと」自体が「喜び」だと書かれているので、その点に言及しているかどうかをチェックすると、①だけが「夜道を全力で走ったことによる充実感を彼ら自身の喜びとして感じ」とはっきり書いている。残りの選択肢はそこに触れていないので、これだけでも①が正解であることがわかる。傍線部 C については、直後に「二人は明日の月夜が待たれた」とあって、二人が娘の走る姿を見に行きたがっていることがわかる。その点について触れているのも①しかない。
	問 6	ふふふ①は、道子の心情が「心内のつぶやきのみで説明されている」とあるが、37～38行目では明らかにつぶやきではない形で心情が説明されている。②は、「おばあさんのようなことをいう」は誇張ではないし、第三場面以降の話を急展開とするのはおかしい。③は、読点のある「まあ」の二つ目は驚きではないし、読点のない「まあ」はあきれた気持ちではない。⑤は、第四場面125行目で「お湯へやって下さい。頭が痛いんですから」と自分から語りかけている。
第3問	問 1	(ア) は「なめげさ」の意味および助動詞「じ」の用法に注意して⑤を選ぶ。 (イ) は「らうたげに」「恋ひ聞こゆ（「聞こゆ」は謙譲の補助動詞）」および助動詞「めり」「し」の用法に注意して①を選ぶ。 (ウ) は慣用句「いざ、給へ」から直ちに④が選べる。
	問 2	例年通りの「文法の識別問題」である。a「限りなめり」の「な」（断定の助動詞「なり」の連体形撥音便の無表記）、b「驚かれ給う」の「れ」（助動詞「る」の連用形で「自発」の用法）、c「のたまひはてば」（補助動詞「はつ」の未然形活用語尾）、d「言ひ知らせ奉り給ふ」（助動詞「す」の連用形、尊敬の補助動詞が下接していない「使役」の意味用法）、いずれも基本的な文法学習事項で、⑤が正解であることは明らかである。
	問 3	傍線部 X 「『心苦し』と思す」の動作主（「誰が」）は、この段落の冒頭に「大将殿」と書かれていることから、ここでまず選択肢は③・④に絞られる。次に「心苦し」は、明らかに④「ひどい」ではなく、③「心を痛め、かわいそうだ」であるから、正解は③である。

第3問	問4	傍線部Y「もの懲りしぬべうおぼえ給ふ」の意味とともに、その「もの懲り」の内容を本文の記述にしたがって解答する。傍線部Yを含む第7段落全体を踏まえた②が正解である。本文中の「かしこ」は「落葉宮」を指すことに気づくことがポイントとなる。傍線部Yの「もの懲りしぬべう」に即しているのは、選択肢②の「嫌気がさしかけている」だけである。
	問5	A・B・Cの各会話文の「話者」とその「発話内容」を正確に読みとる。会話文Aは、この会話文中に「寝殿の御まじらひ」とあることに注目する。「寝殿の御まじらひ」とは前段落の「寝殿になむおはする」をうけており、「寝殿になむおはする」の動作主は「三条殿」であることがわかる。会話文A中「寝殿の御まじらひ」の「御」は尊敬の接頭語であり、これは「三条殿」に対する敬意を示しているのであるから、この会話文の「話者」は「大将殿」であることがわかる。ここで選択肢③は消去できる。 会話文Bの「話者」はすべての選択肢が「三条殿」とあり、会話文Cの話者は④も⑤も「大将殿」とあることから、選択肢①・②・④・⑤にある「三条殿」のと「大将殿」の「発話内容」が正解を得るためのポイントになる。 正解は①である。 ②はA「子育ての苦労くらいで」、B「浮気者との間の子を育てるのに今は飽き飽きしている」が誤っている。 ④はB「私のことはともかく、子どもたちだけは面倒を見てほしい」が誤っている。 ⑤はB「私に飽きたあなたのお気持ちかもはやもとに戻るはずもなく、お好きになさればよい」が誤っている。
	問6	各選択肢とも本文からの引用を含んでいる。その引用の説明が本文の内容に合致しているかどうかをすべての選択肢にわたり一つずつ慎重に吟味し、選択肢に含まれる小さな誤りをも見つけ出さなければならないという意味で、細心の注意力が求められている。 正解は④。これは第8段落の内容に合致している。 ①は「おとどと語ることで」「このまま別れる決心をした」が誤りである。 ②は内容のすべてが誤っている。 ③は「すぐさま」が誤っている。大将殿は「消息たびたび聞こえて、迎へに奉れ給へど、（三条殿の）御返りだになし」だったから「暮らしてみづから参り給へり」なのである。 ⑤は「三条殿の手もとで育つことになる姫君の将来を心配して」「父親の役割を果たそうとした」が誤っている。
第4問	問1	本文中で用いられている意味を問う問題である。本年度は(1)(2)とも漢文の重要語句ではないので、文脈で意味を判断する必要がある。 (1)は「筍を食らふを」に続く内容を考えると④しか意味が通じない。 (2)は「甘きを」に続く内容であること、さらに「尚」は現代でも「たつとぶ」と読み、「尊重する」の意味を持っている。
	問2	返り点と読み方(書き下し文)は傍線部の句形や解答ポイントとなる語句から正答を導くことが多いが、傍線部Aには句形は含まれていない。従って内容を解釈して考える。そこで選択肢を比較してみると、「方長」の読みと「目す」「以て」の語順が問われていることがわかる。 「方長」は選択肢①・④は「長きにならぶ」、②・③・⑤は「まさに長ずる」と読んでいるが、「まさに長ずる(＝まさに成長しようとしている)」しか意味が通じない。 「好事者」は「こうずしゃ」と読み「風流人」の意味がある。これで選択肢②・③・⑤の読み方で解釈してみると、⑤「風流人は目で見て清雅なものへの嗜好によって、まさに成長しようとしている(竹を)斬らない」しか意味が通じない。
	問3	内容読解で空欄を埋める設問である。選択肢は「苦」「甘」対義語の組合せで作られていることに注目して、文章の「対比内容」を考えてみる。 「必棄於Ⅰ者」からⅠは「苦」、対比内容の「Ⅱ者至取之」からⅡは「甘」となる。 「Ⅲ者近自戕(そこなフ)」のⅢは「甘」、「Ⅳ者雖棄」からⅣはⅠ同様「苦」となる。

第4問	問4	<p>傍線部解釈の設問は句形・語句に注目する。再読文字「猶」を「まるで～のようだ」と訳している選択肢は⑤のみである。</p>
	問5	<p>傍線部の書き下し文を選ぶ問題である。解釈の設問同様、句形・語句に注目する。二重否定「莫不」を「ざるは莫し」と読んでいるのは①・③のみである。①・③の違いは「取」「棄」の読み方であるが、直後の文など文中で「取」は「取ら<u>る</u>る」「棄」は「棄て<u>ら</u>るる」と受身に読んでいることから③が正答となる。</p>
	問6	<p>本文を論旨の展開で3つの部分に分ける問題である。1991年以降、この形式の設問は初めて出題された。区切る部分の、前後の内容のつながり方で判断する。 ア＝アの前までの「江南の人々は筍のすべての部分を食用としている＝筍を伐採する」と、アの後の傍線部A（問2）「竹を斬らない」の内容が矛盾している エ＝直後の「夫」は「それ」と読むと「そもそも」の意で話題転換を示す。</p>
	問7	<p>傍線部の読み方は問2同様、句形・語句に注目する。「豈」は「豈ニ～ンヤ」と反語に読むことが多いが、「豈ニ～カ」と読んで「～ではなかろうか」と推量の意になることもある。推量の用例は多くはないので、反語だと思い込んでしまう危険性がある。その他、傍線部には重要語法「以～為～」が含まれている。「以A為B」は「Aヲ以テBト為ス」と読み、「AをBと思う」の意味になる。この読み方をしている選択肢は⑤のみである。「豈」を反語として読むと不正解となるので、注意が必要な選択肢であった。</p>